

3-7					
主題	農業を通じた世代間交流拠点の創出を目指して				
副題	福祉系大学による農福連携の取組				
キーワード 1	世代間交流	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名・事業所名	日本社会事業大学 社会福祉学部 永嶋ゼミ				
発表者(職種)	杉山真美(学生)				
共同研究(実践)者	宮崎みやび(学生)				

電話	042-496-3132	FAX	042-496-3132
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	東京都清瀬市にある福祉専門大学です。社会福祉学部の福祉計画学科と福祉援助学科の2学科から構成されています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

日本社会事業大学のキャンパス内には使われていない土地が多くあった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

大学内の空地を開墾し畑を作ったり、その畑で作物を育てたりという作業を行うことにより、地域住民、近隣の保育園とその園児、障害児施設の職員と利用者、地域包括支援センター、社会福祉協議会、行政、大学生等のさまざまな人々や機関が、それぞれの所属集団以外の多様な人たちと関わり交流する機会と環境を作り出すことを目的とする。

高齢者施設や保育園とともに野菜の栽培や収穫作業を行うことで、高齢者と幼児の世代間交流が促進され、また、作業に関わる大学生と高齢者や園児の交流の場となることも考えられる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

大学内には使われていない土地があったが、植物を栽培できる状態ではなかった。そのためまずは畑をおこすことが必要であると判断し、2023年4月から開墾作業を進めている。現在は、土中の大きなごみの除去が大方終了している。また、畑を作るには長期間かかると考えられたことから、プランターでの植物栽培を2023年6月から開始した。プランターでは、イチゴ、エダマメ、カボチャを栽培している。これらの作業には、永嶋ゼミの学生2名、ボランティアの学生3名が関わっている。

また、散歩などで学内を訪れた近隣の施設の職員に対し、活動への参加を呼びかけた。

《4. 取り組みの結果》

近隣の2つの保育園から今後活動に参加したいという連絡をいただいている。またその繋がりにから、そのうち1つの園より日本社会事業大学の学生に対して、保育園が持つ畑で園児とともに野菜の収穫作業を行ってほしいという連絡をいただいております。既に連携する関係が構築できた。また開墾作業中に、その現場を散歩で通りかかった近隣の障害者福祉施設の利用者・職員の方々とは、数度に渡り交流することができた。これまでの作業やその相談を通して、地域包括支援センターや社会福祉協議会からの協力も取り付けることができた。

今後は、畑での芋類の栽培やプランターを用いた野菜や花の栽培を通じ、高齢者と子供を含む、地域住民などの多様な人たちによる世代間交流活動を行うことを予定している。

《5. 考察、まとめ》

本学学生に対し近隣の保育園の活動へのボランティア協力の連絡をいただいていることから、これまでこの活動に参加していなかった学生も、世代間交流の輪のなかに巻き込むことができると考えられる。

一方で、農地の整備が全て完了しているわけではないため、高齢者施設や保育園等との連携による継続的な活動を実施するには、もう少し時間がかかることが見込まれる。

今後は、整備された農地を近隣住民や施設が交流する場として提供し、さらに地域の社会資源同士の結びつきの強化に貢献することが可能であると考えます。このような地道な取り組みによって、地域共生社会の実現に向けた、福祉学生や福祉系大学の新たな役割も創造することができると思います。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

関係機関に対し、口頭での説明を十分に行った。保育園に対しては、園児等に関わる個人情報収集しないことを説明した。なお、ボランティア学生の活動への参加は個人の自由とし、任意であることを説明した。

《7. 参考文献》

濱田健司「農の福祉力で地域が輝く～農福+α連携の新展開～」2016,創森社

徳永達巳監修「「地域×大学生」が未来をひらく 実践！まちづくり学 拓殖大学編」2019,大空出版

《8. 提案と発信》

大学を世代間交流の拠点とすることで、地域内のさまざまな立場の人の交流や活動参加が促進される。また、農作業や園芸を取り入れた活動の実践事例を増やしていくことで、今後、それらを取り入れた利用者支援を始めようとする施設が、取り組みやすくなるのではないかと考えられる。